

教えることを学ぶことについての一考察 (2)

－ 教職実践演習の実践から －

内 健 史 [鹿児島大学教育学系 (教育実践総合センター)]

Consideration about learning to teach(2) : Through the Education Practice of the Course “Practical Studies for Teaching”

UCHI Takefumi

キーワード：教職実践力、能動的な学修、理論と実践の往還、省察、主体的・協同的な学び

1. はじめに

教職実践演習は、教職課程の他の授業科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するものであり、いわば全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられるものである。この科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される。

鹿児島県教育委員会から人事交流で実務家教員として派遣されている4人で担当しているのが「教職実践演習Eコース」であり、主担当の教員の企画運営のもと取り組んでいる内容は以下のとおりである。

- (1) 教師として必要な実践的資質能力が形成されているかを把握すると同時に、将来教師となる上での実践的な力量形成に向けた「研究テーマ」を設定する。
- (2) 附属学校での教育支援活動等を通して、課題の解決に向けた取組を進め、その成果を記録するとともに、成果報告会で発表を行う。
- (3) 過去受講した講義や文献(本)の活用、卒論との関連づけ、指導教員・支援教員の指導助言等を通して課題やテーマの解決に向けた取組を進めていく。

また、これらの取組における学生の具体的な活動内容は次の通りである。

- (1) 自己課題をもとにした研究テーマを設定する。(テーマについては、授業に関すること・学級経営等に関すること・学習者理解に関すること、の三つの視点の中から一つに絞る。)
- (2) 全5回の支援活動の各回終了後に「教育支援活動振り返りシート」ファイルを記入し、大学担当教員へ提出すると同時に、面談をする。
- (3) 「指導教員」や「支援教員」との面談や他学生とのグループ協議を適宜行う。
- (4) 成果報告会で支援活動及び課題追究の成果を発表し合い、「指導教員」や「支援教員」からの指導を受ける。

なお、本演習においては、附属学校教諭を「支援教員」、教育学部の関係教員を「指導教員」とし、学生自身が支援教員と打ち合わせて決定した活動計画をメールで担当指導教員に報告することになっている。さらに支援活動を行うにあたっては、教育者としての自覚をもち、責任ある言動に努めるとともに、懸念される事案や児童・生徒の変容、事件・事故等の発生については速やかに「支援教員(附属学校)」に報告すること、服装等については教育実地研究(教育実習)に準じること、予定していた日時に教育支援活動に参加できない場合は、(附属学校)「支援教員」と、大学担当者へ連絡すること等も併せて指導している。

筆者は、過去に自身が所属した附属中学校での支援活動を行う学生を前半(H26.10.10～11.28)に7人、後半(H26.12.12～H27.2.6)に7人の計14人を担当した。

本稿は、本科目における筆者の実践を報告するとともに、それらをもとに学生が実践的に「教え

ることを学ぶ」ことに取り組む上で、学生の教職実践力の確保のために教員が果たす役割等について考察するものである。

2. 実践Ⅰ（前半の取組）

授業のスタート時に主担当教員が行うオリエンテーションの中で、学生はこれまでの講義・演習や教育実習、卒業論文等の取組及びそれらの中で生じた成果や課題をもとに研究テーマを各自が設定して支援活動に臨む。表1は前半の学生の研究テーマの一覧である。

表1 前半の学生の研究テーマ

	研究テーマ	教科
A	評価とは何か	英語
B	学びを通じた成長促進	
C	一人ひとりの個性を生かす指導の在り方とは	
D	意欲を高める指導について	
E	教師が資質や経験に頼らずできること	
F	英語科における小中連携に関する研究	音楽
G	発問について	

2.1. 「教育支援活動振り返りシート」の活用

学生は各自のテーマを持って附属中学校の支援教員の指導のもと研究に取り組み、全5回の支援活動を行うが、それぞれの経験を教職実践力の形成に主体的につなげるためには、各回終了後の自分自身が行なった支援活動の振り返りと、今後の実践について考えを深めながら省察することとが欠かせない。

写真1は、各回の活動記録をもとにその省察を学生自身と「指導教員」や「支援教員」とで行うための「教育支援活動振り返りシート」の記入例である。なお、このシートはEコース共通の様式であり、「当日の主な支援活動ならびに趣旨」「取組状況・気づき・感想・振り返り等」「次回の取組（視点や具体的支援の計画）」「指導者コメント」の項目で構成している。

写真1 「教育支援活動振り返りシート」の記入例

指導教員の役割として各支援活動の終了後に行うタスクフォースの実施があるが、この「教育支援活動振り返りシート」をもとに、学生が独力で行うことが難しいと考えられ課題追究と実践のために必要な知識の提供や情報収集についてのアドバイス、課題追究や支援活動の具体的な手だて等について、機を逸しないように指導と支援を行った。その中で、学生の課題意識を高めることと、支援活動と並行して研究テーマについての自己追究を促すこととで、学生が主体的に理論と実践を往還できるようにした。

2.2 学生の変容

このような取組の結果、学生は支援活動を行うという経験を得るだけでなく、研究テーマの追究をととして「この研究で得たことを基に今後も学び続けていきたい。」「自分の研究テーマも深められ、一生考えたいテーマになった。」等の能動的な学修への指針を得られた。また、「実際に教師になってから向き合わないといけな課題にこの時期に向き合えたことは、今後の経験として自分を支えてくれると思った。」「これから目指す自分の教師像がぼんやりとではあるが見えてきた。」「教師になりたい思いが強くなった。」「教育実習では指導案作成等で精一杯であり、本当に生徒を指導できるか心配であったが、たくさん具体的指

導を見ることができ不安が減った。」等の教職への理解、意欲喚起も促されたようである。さらに、「教員志望ではないため、この演習にとっても不安を感じていたが、目的を持って研究することにより、今後に生かせることを多く学んだ。」と教育学部で学ぶことの意義を改めて実感した学生もいた。

このように、附属中学校の支援教員の理解と協力による学校現場での貴重な教育活動の経験を基に一定の成果を得ることができた。しかし、さらに能動的かつ主体的に学ぶためのヒントとなる「他の人のテーマ、視点、考え方を聞くことはとてもよい刺激となり、自分の中に新しい視点が増え、授業も様々な角度から参観できた。」という感想を得た学生もいたことから、後半はさらに協同的な学習となるよう工夫・改善を図ることとした。

2. 実践Ⅱ（後半の取組）

後半は社会科で支援活動を行う学生が6人おり、1人の支援教員が2人の学生を担当して支活動を行うことから、タスクフォースも二人一組で行うことを原則とした。以下に後半の学生の研究テーマを示すが、このような経緯もあり、最終的な研究テーマはペアの学生どうして関連性のあるものとなった。

表2 後半の学生の研究テーマ

	研究テーマ	教科
H	現代社会と関連付けた授業づくりー理解を深めさせるための指導方法の追求ー	社会
I	学習者の現代社会への理解を深めるための授業のあり方	
J	生徒に確かな学力を身に付けさせるワークシートと学習形態の工夫	
K	社会科の授業における資料づくりのポイント	
L	一斉授業の中で生徒一人ひとりの理解度を高めるために教師がすべき支援とは何か	
M	生徒の主体性と理解度を高めるための教師の声掛け	

N	授業の中で生徒の意識をどのように流していくべきか	理科
---	--------------------------	----

3.1. 主体的・協同的な学びを促す手だて

ペアで行うタスクフォースでは、まず、これまでの取り組みを各自が口頭で説明し、指導教員が評価やコメントを行うことでこれまでの取組にどのような意味があったのかを学生自身が把握できるようにした。次に、ペア同士の「振り返りシート」の内容について相互評価することによって、テーマの追究や意味付けが曖昧な箇所や自身になかった気づきを把握し、自身のテーマに関する考察を深化させるために、今後に取り組むべきことが具体性を持って理解できるようにした。

このようなねらいと内容で行なったタスクフォースにより、以下の振り返りの文章からうかがえるように学生は共通の支援活動の体験をもとに協同して学ぶことの意義を実感し、相互に関わりながら以後の支援活動と研究テーマの追究に意欲的かつ意図的に取り組むことができた。

（学生Lの振り返り）

- 自分の考えていたことや感じたことを先生が端的にまとめて話してくださったことで自分の中できちんと整理ができた。自分の「机間指導」という研究テーマにおいて「一人一人の理解度を高める」という目的がMさんの「主体性を育てる」というテーマに直接結びついていると分かり、それぞれの気づきを伝え合って考え直すことで、自分の研究テーマについてさらに考えが深まった。次回は机間指導以外での教師と生徒との関わりやグループワーク中の生徒どうしの話し合いに目を向けて授業を参観していこうと思う。また、生徒が発言、挙手したくなるような声かけに挑戦する。

（学生Mの振り返り）

- ここ数回でLさんのテーマと私のテーマが交差していることを感じていた。元々は異なる視点からのテーマであったのに、交差してきているので授業は様々な要素からできているのだと感じた。また、Lさんと授業について気づいたことを話すと、自分が気づかなかったことや見落としていたことや考えもしなかったことに気

づいているので、二人の気づきが合わさること
で授業や研究テーマについて新しい視点から考
えるきっかけをもらえるのでとても有意義なも
のだと感じた。主体性を育て、引き出す声かけ
にはどのようなものがあるのか、どのような声
かけが良くて、どのような声かけが生徒の主体
性を損なってしまうのか、ということ調べた
い。

3.2. 課題意識の連続・課題追究の深化を図る手 だて

このような取組をととして課題意識の深まりや
広がり、実践をととした課題追究と新たな課題
が生じて、各支援活動ごとに記録する振り返り
シートだけでは、そのつながりや課題追究の深まり
は自覚化できない。そこで、写真2に示すワー
クシートを作成し、各回の成果やインターバルの
研究・取組を記入させることで、課題意識の連続・
課題追究の深化を図った。

研究テーマ
英語学習のモチベーションを高めるための授業改善

活動1 (1/15)
授業改善の目的を明確にする。授業改善の目標を設定する。

活動2 (1/22)
授業改善の目的を明確にする。授業改善の目標を設定する。

活動3 (1/29)
授業改善の目的を明確にする。授業改善の目標を設定する。

活動4 (2/5)
授業改善の目的を明確にする。授業改善の目標を設定する。

活動5 (2/12)
授業改善の目的を明確にする。授業改善の目標を設定する。

総括
授業改善の目的を明確にする。授業改善の目標を設定する。

写真2 ワークシートの記入例

3.3 学生の変容

これまでに述べてきた手だて等により、学生の
意識は「授業研究はとても面白く、このような仕
事ができたらと思う。この授業をととして教師
になった時に必要なことをたくさん学べた。」「全
くのゼロからのスタートだったが、周囲の人の支

えがあって、授業を行い、しっかりと研究を進め
ることができた。研究してきたことをこれから社
会に出た時に活用していけるよう身に付けていき
たい。」「今回研究したことは教育の側面に過ぎ
ないので、常に向上心を持って教師を続けていき
たいと思った。」など求められる教師像でもある
「学び続ける教師」につながる意識の芽生えを感じ
た。

また、協同的な学びについては「二人一組で実
習を行うことで、お互いの研究課題について随時
指摘し合えたのが良かった。今回の実習で行なっ
たように、授業者側の視点だけでなく、生徒側の
視点を加えて授業改善を行なっていくことはとて
も重要だと感じた。」という具体的な効果が述べ
られていた。さらに、「先生の助言により、答を
考えやすくなったり、理解がより深まったりした。
とても成果のある講義であったと思う。」という
感想からは、改めて指導教員の役割と責任の重さ
を感じることであった。

4. 「教えることを学ぶこと」についての考察

これまでに述べてきたように、本実践が教職実
践力を培う教育学部における学びの集大成にふさ
わしいものになるよう、能動的な学修、理論と実
践の往還、省察、主体的・協同的な学び等を意識
して手だてを講じてきた。その成果について考察
する上で、特に印象に残っている2人の感想を以
下を示す。

- ・ Eコースでの経験は、私の大学生活で不足して
いた知識を身に付けることができたとてもよい
ものとなった。教員にはならないが、働く上
で人と関わる機会が数多くあるので、今回の経
験を生かし一人ひとりをよく見て援助したり、
見守ったりして成長に携わっていきたい。
 - ・ 実際に学校現場で教育活動を行うという点で
は教育実習と通ずる点があるが、3年時の実習
から間隔を空け、この時期に行うという点に意
義があると思う。教員として現場に出る前に、
生徒・児童の実態を掴み、教育支援活動の内容
を考察できるからである。
- この感想から読み取れるように、実際に支援活
動を経験しながら学ぶこの演習は、「教えること

を学ぶ」上で大きな意義があり，そこにかかわる教師の役割の重要性を改めて実感した。

受講生一人ひとりについて卒業基準としての教職実践力が身に付いたか判断することは容易ではないが，教育を専門的に学んだ指導者としての資質を身につけるために，学生自らが自身の経験に基づき理論と実践の往還をとおして具体的な指導方法の必要性や有効性を実感したり，自己の課題解決のために必要な知識等を体得したりすることが重要だと考える。

教職に就いてからもこのような経験を通して児童生徒の変容や指導力の向上を実感しながら，学校現場における課題解決を目指した実践的な学び方や新たな指導方法を身に付けようとする意欲や態度の原点となるような学習体験を，大学教員が学生に保証していくことの大切さを再認識した本実践であった。